十二の眼

装画　猫又カホ

ブックデザイン　鈴木成一デザイン室＋宮本亜由美

第一章　ある日の殺人　5
第二章　旋律の始まり　45
第三章　混乱　79
第四章　出現の予感　131
第五章　十二の眼の誕生　208
第六章　決行　261
最終章　叫びの音　312

第一章　ある日の殺人

東京。六本木。

警視庁麻布警察署、刑事課強行犯捜査第二係の刑事、庄子敬之（しょうじのりゆき）は署内にある通称「リモコン」で、パイプ椅子に座って両足を投げ出していた。「リモコン」とは簡単にいえば通信指令室だ。麻布署が管轄する六本木、西麻布――その区域で問題が発生するとここに無線が入る。二〇二四年六月六日、午前二時。宿直の庄子は目を閉じ、呟いた。

「暑（あち）い」

おなじくリモコン部屋にいる若手刑事が、庄子を見て笑う。

「庄子警部補、足、揺れてますよ」

「うるせえ」

投げ出した足が貧乏ゆすりをしている原因は煙草だ。麻布署も署内禁煙になって久しい。

「煙草は吸えない、おまけにこの暑さ。夜中に三十三℃だぞ、信じられるか？　この歳で宿直する身になってみろ。きついぞ。昭和の六月はもうすこし……」

今年で五十歳になった庄子が愚痴る。
「とか言いながら、警部補が見た目と違って真面目なのは知っていますよ。こうやって宿直の時は、いつもリモコンか課にきちんと詰めているんですから」
見た目と違ってとは心外な、と思いながら、身長が百八十センチを超える巨体を揺らして、庄子は視線を送った。
「……うるせえ。駄目だ、外に煙草吸いに行ってくる。なにかあったら」
その時だった。無線のがー、がーという機械音が部屋に響いた。
〈六本木六丁目××の路上で、若い女性が腹部を刺された状態で倒れているとの通報あり……〉
庄子の顔が変化した。
「……無線聞いてろ」
「はい」
急いで庄子は強行犯捜査第二係へと戻る。五人の刑事がそれぞれ作業を止め、流れる無線に集中していた。それは先ほどのリモコンと違い、警視庁通信指令本部から直接指示される「基幹系」と呼ばれる無線だった。
〈麻布署管内で「人が死んでいる」との一一〇番通報あり。場所、六本木六丁目××。なお、通報者によれば〉
無線に集中していた庄子を除く捜査第二係の刑事たちが、次の言葉を聞いて同時に視線を合わせた。
〈――通報者によれば、道で死亡している女性は矢島紗矢さんではないか、との証言があり……

繰り返す。道で死亡しているのは〉
刑事たちが今度は一斉に庄子を見る。庄子は言った。
「……矢島紗矢って」
「有名な女子アナです。入社二年目で朝のニュース番組の司会をやっている……いまいちばん人気がある子ですよ」
「局はどこだ」
「東都テレビです」
「……まずいな」
東都テレビといえば民放のキー局だ。無線の情報が事実なら、おおきな騒ぎになるのは確実だ。庄子は唇を噛み、舌を打った。廊下には鑑識係などの警察官たちが、おなじ無線を聞き、歩を速めている。
「一緒に来い」
三十代の刑事が庄子の横に駆け寄る。庄子は二係に残す刑事のひとりに言った。
「……林檎を叩き起こせ。いますぐ現場に来いと」
「わかりました」
今日は非番の強行犯捜査第二係の女性刑事、一之瀬林檎。庄子は彼女を呼ぶように指示した。
東京中のセレブがこぞって集まる街の警察署とは思えぬ、灰色の薄暗い階段を下る。二階へ降りると麻布署に詰めている番記者たちが井戸端会議をしていた。庄子は隣の刑事に目だけをむけ、歩を緩めるように指示する。大手新聞社の記者が、「事件ですか」と問う。

庄子は、
「煙草だよ」
と言い、彼らが見えなくなると再び階段を駆け下りた。
署の表へ出ると、むせ返るような暑さと湿気が地から跳ね返り、一気に躰が汗ばむ。右へ行けば東京でも随一の繁華街、六本木。左へ行けば西麻布。今日も都会の喧騒に身を置く人間たちの姿と眠らぬ車たちで溢れている。車両でむかえば、真夜中だというのに渋滞に巻き込まれるだけだ。
「走るぞ」
庄子は五十歳の躰に鞭を打ち、コンクリートの地面を蹴った。

六本木ヒルズにほど近い、裏路地に辿り着く。荒れる息を整え、あたりを見る。まだ報道陣もやじ馬たちもいない。道の先には鑑識係の警察官が現場を保持している姿が見える。
「庄子警部補。おつかれさまです」
「おう」
見慣れた鑑識係の声に返し、彼らの背後から地面を覗く。
——白いスカートを穿いた女性らしき姿が見えた。
顔を見ると、まるでそこだけ六本木の外灯をスタジオの照明に変化させたように、美しい女が微かに照らされ、横たわっていた。死してなお美貌を保つ被害者は、間違いなく人気女性アナウンサーの矢島紗矢だった。

目の前の鑑識係が、横にずれる。
警察官生活三十年余り。そんな庄子でさえ、思わず顔をしかめた。
それほど醜い遺体だった。
上半身にはスカートとおなじく、白い薄手のニット。だがその可憐さに反するように、アスファルトに大の字で倒れる彼女の上半身は、深く十文字に抉られ切り裂かれている。内臓の一部も目視できた。その中央には凶器と見られるナイフがまっすぐに突き立てられ、まるで彼女は、十字架に赤く染まる真夜中の聖者のようだった。
「やばいな……でかい案件になるぞ」
庄子は六月の梅雨の湿気に額から汗を垂らしながら、呟く。現場にはおそらくいちばん早く到着したであろう、二名の交番勤務の制服警察官が立っていた。庄子は鑑識の輪を抜け、彼らに近づく。ふたりは庄子を見て敬礼する。
「ご苦労さん。通報者は」
「それが、いないんです」
「いない？」
「通報したあと、現場近くには留まらなかったようで……」
「……そうか」
制服警察官が悔しそうに顔を歪めた。第一発見者である可能性も高い通報者には、是が非でも会いたいのが警察官の性だ。だがこのような場合、通報したのちに消えてしまうケースも案外多い。理由は簡単で、まだ近くに犯人がいるのではないかという恐怖心、そして「巻き込まれたく

ない」という人間がいるのも事実だ。「通報したのだから最低限の義務は果たした」と考えるのを責めることはできない。

　すると背後から足音が聞こえた。ヒールの音だった。

「おつかれさまです。遅くなりました」

「おう。悪いな、非番に」

「いえ」

　庄子が振り返ると、そこには麻布警察署刑事課強行犯捜査第二係の一之瀬林檎が立っていた。大学卒業後に警察学校へ入校、半年の研修を経て警視庁麻布警察署に卒業配置、そのまま六本木交番で二年間の交番勤務を終え、刑事課に配属された二十七歳だ。いまはまだ庄子から見れば赤子ともいえる、刑事二年目の新人だった。通称、「林檎」。

　林檎は十文字に裂かれた遺体を見て、唾を呑んだ。が、若手とはいえ刑事の矜持なのか、それとも元来持っている気のつよさからか、すぐに表情を戻した。

「女性アナウンサーの矢島紗矢で間違いないですよね。身元を確認する物は？」

「ああ、さっき鑑識が鞄のなかにあった財布を確認した。免許証と保険証からも彼女で間違いないだろう」

　林檎は黙って、すこし口元を歪ませて、なにかを考えているような表情で遺体を見つめた。庄子はしばし、放っておいた。

「でもなんでこんな時間にひとりで歩いてたんだろうな」

「通報は何時ですか？」

「最初にリモコンに入ったのが、午前二時くらいだ。煙草吸いたくて時計ばかり見ていたから、よく覚えてるよ」

　庄子が言うと、林檎は頬を緩めた。彼女は容姿端麗だ。が、それを鼻にかけたりはしない。時としてそれが損になることも知っているのだろうし、大学時代はなにかホウキのような棒を持って走り回るスポーツ――ラクロス部でキャプテンも務めていたくらいだ。生来の明るさと周りを見渡せる目を持つ林檎を、庄子は密かに評価していた。

「煙草、やめたほうがいいですよ」

「うるせえ。刑事辞めたら煙草もやめるよ」

　林檎は庄子の発言に微笑を浮かべたが、すぐに表情を戻した。

「この時間に歩いていたのは、朝の生放送のためでしょう。彼女が司会を務める朝のニュース番組は、午前五時スタートですから」

「なのにこんなに早く出社するのか？」

「庄子さん。女性はメイクも髪の毛のセットもあるんです。おまけに彼女には衣装や番組の打ち合わせもあるでしょうし。庄子さんみたいに髪の毛になにか付けてばーっと上げて、スーツ着るだけじゃないんですから」

　庄子は、ネクタイを緩めてボタンを外した白シャツに、いつもの黒いスーツ姿の自らを見た。林檎は膝を曲げ、遺体に視線をむける。じっと観察し、やがて立ち上がった。

「いいか？」

「はい」

「じゃ、いちど署に戻るぞ」
林檎は遺体に、しずかに手を合わせた。
庄子もゆっくりと手を合わせた。

＊

午前三時前の六本木通りを歩く。首都東京の中心部を走るこの通りには、眠ることを忘れた車たちが今日も右に左に走っている。
「珍しいじゃねえか、その格好」
庄子は林檎が着ている黒いパンツスーツと、白いカットソー姿を揶揄して言った。普段の林檎は、動きやすい格好をしているからだ。
「呼び出しを聞いて、これはすぐに特別捜査本部が置かれると思いまして。警視庁捜査一課のお偉方も来るでしょうから、一応」
庄子は薄く笑った。と、
「え？　似合ってません？」
と林檎が笑う。
こういった機転がきくところも、庄子が彼女を評価している理由のひとつだった。呼び出しで気が急くなか、先を見越せる視線。普段はよく笑う明るい刑事だが、冷静な部分も持っている。これは刑事にとって、重要なことだ。
「どう思うよ、あの殺し方」

「まあ、凄惨ですよね。普通に考えれば恨みを持った人間の犯行ですけど、わからないですね」
「わからないって？」
「遺体もどこか特徴的でしたし。それに被害者の矢島紗矢は有名人ですから。令和の現代は社会に不満を持った、すこしおかしな輩もいますし」
「だな」
庄子は林檎の答えに満足した。凡庸な刑事であれば、現場の状況を安易に判断して「恨みの線」に固執してしまうが、林檎はきちんとすべての側面に目をむけている。林檎を呼び出してよかったと、庄子は心中で思った。
「被害者のご家族には？」
「署から伝えているだろ。彼女は通常ならこのあとに生放送がある。当然東都テレビにはうちから連絡を入れているはずだ。家族にも連絡しないわけにはいかん」
「ですよね」
「このあと大変なのはマスコミ対応だ。まず東都テレビが数時間後の生放送で、彼女が出演できない理由をどう話すか……だが、事が事だ。おそらく局も正式には発表しないだろう。当然警察としても初動捜査の内容までは触れさせたくない。だからいまマスコミに勘づかれるのは避けたい。まずはうちに張り付いてる番記者どもだ」
「はい」
「矢島紗矢の経歴ってわかるか？」
「確か青城大学を卒業したお嬢様、という触れ込みだったと思います」

「触れ込み？」
「ええ。見た目の可愛らしさもあって、入社一年目からすぐに人気が出たんです。雰囲気も服装もいかにも清純派というイメージで、男性の方にそれは人気があって」
「なんだよ、その含みのある言い方」
林檎は顔だけを庄子にむけた。
「彼女、去年スクープされたんです。永山渉と付き合っているのではないかって」
「永山渉って……あの永山か」
「ええ」
永山渉といえば、平成の中期、日本に突如現れた異物のような存在だった。バブル崩壊後の日本を嘲笑するように、「古き良きサラリーマン社会」の慣習をぶち壊していった。そして、敵対的株式公開買い付け（ＴＯＢ）を積極的に敢行し、数々の大企業の筆頭株主となり買収を繰り返した。「サラリーマンの年功序列？　そんなもん蟻の餌にもならない」という彼の発言は社会に衝撃を与え、一部で激しい反感も買ったが、その後は永山につづくかのように多くの物言う株主が登場した。ある意味「現代」を象徴するような存在だ。
「永山なんて、おれと年齢が変わらないだろ」
「そうです。なのでもちろん彼女は交際自体を否定しました。でもね、どこかの高級鮨店からふたりで出てくる写真を見たら……ね」
「ね、ってなんだよ」
「ふたりがどういう関係かなんて、知らないですよ？　でもね、あ、こりゃただの清純派じゃないな、と。女ってわかるんですよ、いくら〝わたしは穢れを知らないタイプです〟なんて清純な雰囲気を出されても、本質は違いそうだなとか。男の人はね、簡単に騙されますけど。特におじさんは」
林檎はにやと笑った。
「なるほどな」
「さっきの遺体、上下白色のニットとフレアなスカートでとてもシンプルに見えますが、あれ、全部超高級ブランドですよ。おそらくニットはＬＯＥＷＥ、スカートとパンプスはＪＩＬ ＳＡＮＤＥＲ。鞄はどこのだと思います？」
「……そんなの、無印良品とかじゃねえのかよ」
「正解はＤＩＯＲ。あんな清純そうなシンプルコーデに見せて、彼女の遺体の総額は、二百万円超えです」
庄子は驚き、口をへの字に曲げた。同時に、彼女が先ほど口元を歪ませて、なにかを考えているような表情を浮かべていた理由はこれか、と悟った。庄子は問いを重ねる。
「でもいくら人気の女子アナといっても、彼女はサラリーマンだろ。そんな服を局からの給料で買えるのかよ」
「実家が大金持ちという可能性はもちろん、ありますが。ネットでそういう情報が出ていないか、確認しておきます」
林檎は様々な色を綯い交ぜにして輝く、六本木のネオンを睨むように呟いた。こいつを呼んでよかった、庄子は言葉にせずとも思った。

「助かるよ林檎。おれには女のファッションなんてわからんからな」
「警部補、林檎って呼ぶのやめてくださいよ。苗字の一之瀬にしてくれないですか？」
「んなこと言ったって、おまえは〝林檎〟じゃねえか。みんなそう呼ぶし」
「それは庄子さんが呼び出したから、署員に伝染したんじゃないですか。署のあっちこっちから果物の名前で呼ばれるわたしの気持ちにもなってくださいよ」
林檎は唇を尖らせる。不服を伝えるために敢えて階級で呼んできたのだろう。庄子は微笑をたたえた。
「おまえさんの明るくて皆に好かれる活発な性格。それは親が林檎なんてハッピーな名前付けてくれたからだぞ。親に感謝だろ」
「……わかりましたよ。あ、あとこれは忠告です。〝女子アナ〟という呼称は現代では禁止です。正しくは〝女性アナウンサー〟。これ男の刑事はみんな言いますけど、記者の突撃のときに女子アナなんて言ったら、思わぬ批判の矢がこちらに飛んでくる可能性もあります。気をつけてくださいね、警部補」
「……おう」
前方にうっすらと、麻布署の光が見えてくる。自然、ふたりの表情は引き締まった。
「戦争の前に一服させろ」
「……まったく」
庄子は人がいない車道側のガードレール脇の茂みに立ち、ポケットから白いマルボロを出す。携帯灰皿を開け、煙草に火を灯す。違反なのはわかっている。が、こんな実体のないまやかしの

街で煙草を吸ったからなんだというのだ。そんな蟻よりもちいさな事象より、これからたいへんな事件とむきあわねばならない。
紫煙を闇夜に上げながら、庄子はしずかに口を開いた。
「林檎」
「はい」
「一個だけ……やっぱ疑問があってよ」
「なんですか？」
ふいに彼から問いを投げかけられたからか、林檎は緊張の面持ちになった。
「……遺体を見つけて通報してきた人間、いるだろ？」
「はい」
「――なんで通報者は、現場から去ったんだろうな」
突然の問いに、林檎は眉根を寄せて一点を見つめる。だがすぐには答えが出ないようだった。
「人がそこで死んでんだ。動揺して一刻も早くその場を去りたい気持ちはわかる。でもな……やっぱり通報までしておいてな……どう思う？」
ふたりはそれぞれに、黙った。
と、林檎が真っ直ぐに庄子を見て、詫びるように呟く。
「すみません。まだ答えが出ません」
「そうか。まあ、なんか……通報者に事情があったのかもな」
呟くと、林檎もしずかにうなずいた。

「とにかく……でかいヤマになるぞ、林檎」